
スカウトマン

華菜恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカウトマン

【Nコード】

N1627D

【作者名】

華菜恵

【あらすじ】

マヤがスカウトの男にハマリ、夜の世界に飛び込んでいくお話です。

出会い

「今からどこ行くのお？」

仕事の帰り道知らない男が声をかけてきた。
見た目からして遊んでそうな・・・。

「今何か仕事してる？」

いつもいつも。

駅を出るところやってスカウトやキャッチに声を掛けられる。
いつもなら無視して早歩きして帰るんだけど、この時は違った。

好みの顔だったからだ。

キャバクラでの仕事に興味はないけれど、携帯の番号を教えた。

「君名前何てゆうの？」

「マヤ。」

「マヤちゃんかあ。」

可愛いよねえ。俺はヒロキ。よろしくね。」

可愛いとか誰にでも言ってるんだと思うけど、少し照れた。

「今日見学だけでもしてく？」

「う、うん。」

もちろん働く気なんてさらさらない。
でも、もう少し話していたかったのだ。

「駅からも近いし、うちの店キレイで広いだろ？」

「そ、そうだね。」

「もしかして、緊張してる？」

「ちょ、ちよつとね。」

「こつゆう仕事って初めて？」

「うん。」

「そつか、まあ何でも相談に乗るから大丈夫。
皆いい人達だし、俺もフォローするからさ。」

「う、うん。」

働いてもらいたいから優しいんだよね。
わかってても、優しい人なんだと勘違いしてしまいそうになる。

「今日はもう帰るね。」

「うん。また連絡するから、電話出てよ？」

「うん。じゃあね。」

少し店を見せてもらって私は帰った。

連絡……。

仕事のことで連絡してくるだけだね。

家に着くと早速ヒロキから電話がかかってきた。

「もしもし。ヒロキ君？」

「うん。今日どうだった？
いい店だろ？」

「ま、まあね。

でも、私なんかが働けるような感じじゃないかな……。」

「何言ってるんだよ。

俺可愛いって思った奴にしか声かけないし、マヤはスゲー可愛いぜ？」

「そ、そうかな？」

信じてしまいそうになる。

私はそんなに自分に自信もないし、店にいる子は皆すごくキレイで私なんか完璧に場違いって感じだったのに。

「明日さ、体験でも大丈夫だから働いてみない？」

「む、無理無理！！

そんな急に……心の準備とか……。」

「そうだよな。ゴメンゴメン。

じゃあさ、とりあえず、不安なこととか何でも話し聞いてやるから

明日メシでも行かねえ？」

メシ？

普通に仕事しなくても会えるんだ・・・。

「わかった。いいよ。」

もちろん返事はオーケー。

仕事に興味なんかない。

あるのはヒロキに会いたいとゆう気持ちだけ。

「じゃ、明日七時に今日声かけたところで待ち合わせな。」

電話を切って、私は明日何を着ていくか悩んだ。

やっぱりああゆう人はギャルっぽいのが好きなのかな。
女の子らしくした方がいいのかな。

色々考えた結果少し派手な服を選んだ。

買っつてずっと眠ってた服だ。

緊張する。

ご飯って何食べに行くのかな。

食べやすいものがないな。

何考えてんだろ。

仕事の話しに行くだけなのに・・・。

今日はもう寝よう・・・。

デート

朝起きるとヒロキから着信があつた。

「もしもし、朝電話した？」

マヤは掛け直した。

「うん、今日の約束覚えてるかなと思って。」

「覚えてるよ。」

「そんな訳ないじゃない。」

「そか、そか。」

「じゃあ、待ってるからな。」

「今日仕事か？」

「う、うん。」

「五時までね。」

「頑張れよ。」

「疲れてしんどかったら、今日はナシにしてもいいからな。」

「やっぱり優しい人……。」

「ありがと……。」

ヒロキからは確認の電話だったみたい。
電話で話してるだけでドキドキする。

ただ、顔がタイプなだけで好きとかそんなんじゃないんだけど・・・。

「あ、用意しなきゃ。」

マヤは仕事に行く準備をした。

マヤは中学の卒業と共に地元の喫茶店で働いている。

「おはようございますー!!」

「マヤちゃん、おはよう。」

今日も忙しいから早く着替えて手伝ってちょうだい。」

「はい。」

モーニングはいつもこんな感じ。

朝から途切れる事なくずっと忙しい。

「マヤちゃん、休憩行っていいわよ。」

店長だ。

この店の店長は女の人で、結構美人だ。それに、マヤには特別優しい。

「ふう〜。」

「マヤちゃん。」

今日もモーニングお疲れ様。」

これは、同じ喫茶店で働くユリちゃん。
昔はキャバクラで仕事してたとか……。

「ユリちゃん。

キャバってどんな仕事するの？」

「え？

マヤちゃん、お金困ってるの？」

「いや、そんなんじゃないけど……。
どんな仕事してるのかなって思っただけ……。」

「ん……。

お客さんと喋って、お酒飲んで……。
まあ、難しいことはしないけどねえ。」

「そっかあ。

ユリちゃんはどうして辞めたの？」

「好きな人が出来てね。

お客さんだったんだけど、仕事辞めて付き合ってくれて言われたの。」

「お客さん?!」

「そうそう。

まあ、ほとんどがおっさんばっかなんだけど、たまに若い人が来たりもすんのよ。

最初はもちろんお客さんだけだったんだけど、一緒に話してるう

ちにどんどんね・・・。」

「何か素敵ね。」

「彼はね。たまたま。」

「そんないいお客さんばかりじゃないわ。平気で胸触る人もいてるし。」

「年齢を偽ってる人とか、夜の世界は嘘がつき物って感じ。」

「・・・。」

「あれ、まじにキヤバ考えてた？辞めた方がいいわよ。」

「あんなの、お金に困った人がする最終手段。」

「まともな子が働いてもすぐ辞めるのがオチよ。」

「そんな・・・。」

「働くだなんて、そんなつもりは・・・。」

「何かありそうね。」

「まあ、その辺のことならユリに相談して。いつでも話聞くからさ。」

「じゃ、休憩終わりだから行くね。」

「あ、うん。」

「お疲れさま。」

「最終手段か・・・。」

「そうだよね。」

「そんな楽な仕事ならあんなに給料もいいハズないし、皆してるわよ。」

ね。

仕事しよ・・・。

マヤは仕事に集中した。

キャバクラで働くとヒロキに毎日会える。

ヒロキも喜ぶ。

もつとヒロキを知りたい。

ヒロキのことが頭から離れなかった。

デート2

「お疲れ様でしたあ!!」

やっと今日の仕事も終わり。

いよいよヒロキとデート・・・か。

緊張する～!!

「マヤちゃん!」

「ユリちゃん・・・。」

「おつかれ。」

今からコーヒーでもどう?」

「あ、今日約束あるんだ・・・。
またね。」

「そ?」

何かあったら一人で考えないでちゃんと相談してよ?」

「ありがとう・・・。」

ユリちゃんは心配してくれてるみたい。

でも、まさかスカウトの人が気になるから・・・なんて言えない。

ユリとわかれてマヤは真っ直ぐ家に帰った。

喫茶店では髪を結んでいたの、ほどくとゴムの後が付く。

「こんなんで会えないってば。」

マヤはシャワーを浴びて髪をコテで巻いてみる。

「うまく巻けないんだよね……。」

コテは持つてるけど、うまく巻けなくてほとんど使ってなかったのもあってやればやる程髪はぐちゃぐちゃになった。

「やっぱりストレートにした方がいいかな。」

諦めてアイロンで完璧にストレートにした。

化粧もいつもより濃く派手にした。

昨日決めておいた少し派手な服に着替えてヒロキとの待ち合わせ場所に向かった。

ブルルルルル……

ヒロキからだ。

「もしもし？」

「あ、俺。」

今から出るけど、今日大丈夫かあ？」

「うん。もう私は家出たよ。」

「まじ?!」

じゃ、俺も急ぐわあ。」

「急がなくても大丈夫だよ。
待ってるから。」

「バカ。」

俺は女を待たす男は嫌いなの！！

しかも、マヤみたいな可愛い奴一人で待たせてたら変な奴にナンパ
されんだろ。」

「まさかあ！」

ヒロキは結構男らしいところもあるんだ。
てゆうか、ナンパされたら嫌なのかな？
ちよっと期待しちゃうじゃん。

マヤが待ち合わせ場所に着くとヒロキが走って来た。

「ワリイ、待たせちゃったなあ。」

誰にもナンパされてないだろうな？」

「今着いたトコだよ。」

そんなに走って来なくても大丈夫なのに・・・。」

「走っても死ぬ訳じゃねーんだから、待たすよりいいだろ。」

「バカみたい。アハハ。」

「ハア？」

ヒロキは優しい。

とゆうより、ヒロキといると自分は女の子なんだって思える。」

「何食う？」

「え、あゝ何でもいいよ。」

「今日は俺のおごりだから好きなもん言えよ。今日だけ特別なぁ。」

「え、今日だけ？」

「おう。」

今日は初回サービスです。次回からは有料になりまーす。なんつって。」

またデートしてくれるんだ……。だったら有料だろうと何だろうとかまわない。

「まあいいや。」

何がいい？

俺、腹減ってヤベーから早く決めろよなー。」

「じゃ、じゃあ……。オムライス！」

「ははははは。」

女はオムライス好きだよなあ。

寿司とか言われたらどうしようか思ったよ。」

二人は近くのオムライス専門店に入った。

「ヤベー。」

この雰囲気マジ俺苦手。」

「ごめん。」

違う店にする?」

「マヤが食いたいもんだから我慢する。
初回だし?」

「何それ。」

「冗談、冗談。」

マヤが食いたいなら苦手な店も我慢できるって事だよバーカ。」

どうゆう意味?

何でそんな期待させるようなこと言うの……。
好きになっちゃうじゃない。

「俺、変わったもんで苦手なんだよね。
だからオムライスはやっぱケチャップの……。
ってないじゃん!!」

「専門店とかだとあんまり置いてないよ。
これを機に変わったやつ食べてみたら?
結構美味しいんだよ?」

「ん〜。」

多すぎてよくわかんねー。
俺マヤと同じのでいいよ。」

「私、キノコとサーモンのホワイトクリームソースにするけど、キノコ食べれる?」

「なんだよそれ。」

キノコもサーモンも食べるけどマズそうだなー。」

「じゃ、違うのにする?」

「いや、マヤと一緒にいい。」

「そ?」

じゃ頼むよ。」

店員さんを呼んで二人同じのを頼んだ。
何かカップルみたい・・・
そう思ってるのも私だけなんだろうな。

「不安?」

「え?」

「キャバクラ。」

「そ、そりゃあね。」

私、今働いてる喫茶店でしかバイトとかした事ないし。」

「へえ。」

まあ、そんな経験のなさが逆にウケたりするもんだよ。
キャバはさ、人と人だから賢いとかバカとか関係ないんだ。

要は客がマヤとまた話したいって思うか思わないかってだけ。」

「どうしたらいいの?」

「そんなの皆のオリジナル。」

マニユアルなんてないんだからさ。

マヤが色んな客に合わせて色んな人間に変身すればいい。」

「変身?」

「そう。」

楽しくワイワイ飲みたいタイプの客だったら元気な明るいタイプの人間になるとか、

悩み抱えた客だと、必死に相談乗るとかさ。

逆に悩みを忘れられるように楽しく過ごさせるってのも有りだと思
うし。

マヤがその客の求めていることに気づいてあげてひと時の夢を見せて
あげる、って感じかな。」

「そんなの・・・。」

「そんなに難しく考えないで。」

友達と喋ってるのと同じでいいんだよ。」

「友達と?」

「うん。」

友達が悩みあつたら、励ましたり相談乗ったりするだろ?
それと同じだよ。」

「そっか。」

でも、胸とか触られたりとかあるって聞いたんだけど・・・。」

「基本的にキャバではお触りは禁止。

ボーイが止めてくれるから心配しなくても大丈夫だって。それでもダメなら俺がぶっ飛ばしてやるから。」

「ばーか。」

ヒロキが助けに来てくれるなら胸触られてみたいかな・・・。

「お待たせしました。」

注文していたオムライスがテーブルに置かれた。

キノコたっぷりでもおいしいそう。

「うわ〜。

ソース白色じゃん。

牛乳がよって感じ。」

「まあまあ、食べてみなよ。」

「いただきますっ。」

ヒロキは戸惑いながら少しだけオムライスを口に入れた。

「!!!!」

「どう?」

「んまい!!」

ヒロキは満面の笑みでオムライスをほうばった。

ヒロキってこんな顔して笑うんだ。

チャラチャラした見た目とは違って少年のような笑顔。ずっと見ていたくなるような・・・そんな笑顔。

「何見てんだよ？」

そんな見られたら食いにくだろ!」

「ごめん。」

笑った顔初めて見たから・・・。
意外と可愛いんだなつて。」

「か、かわいい!？」

バカにすんなよ。

てゆうか、早く食えよ。

冷めんど。」

「誉めてるんだよ？」

気悪くした？

ごめんね。」

「そんなんじゃないけど、男ってのは可愛いって誉め言葉になんねーの。」

「アハハハ」

ヒロキといるとたわいない話も夢のように楽しかった。

こうゆうのをキャバクラでお客さんは求めてるんだろう。
こんなに楽しく話してお金貰えたらどんなに楽だろう……。
キャバクラで働くのも悪くないかな。

ヒロキがいつでもこうやって相談に乗ってくれるなら安心だし……。

「ごちそうさまでした。」

「おう。」

「考えたんだけど、明日体験行ってみようかな……。」

「まじ?!」

大丈夫なのか?」

「うん。」

頑張れそうな気がするの。」

「……。」

ならさ、俺ずっと店内いてやるから何かあったらすぐ言えよ。
帰りたくなったらすぐ帰っていいからさ。」

「ありがと……。」

皆にもこんなに優しいのかな……。
やっぱり期待しちゃうよ。

「今日は送るよ。」

「大丈夫だよ。」

家近いから。」

「ナンパされたらイヤなんだよ。
何度も同じこと言わせるなよ。」

ナンパされるのが”イヤ”??
何で?

「とりあえず帰るぞ。
明日も朝から仕事なんだろう?
早く寝て、夜まで体力残しとけよ。」

「う、うん。」

ヒロキは家まで歩いて送ってくれた。

「じゃ、明日また連絡するから。」

「うん。
ありがとう。」

ヒロキと分かれてマヤはキャバクラのことなど頭になかった。
ずっとヒロキの顔が頭から離れない。

私ヒロキのこと好き・・・のかな。

そんなことを考えてる内にマヤは眠ってしまった。

決意

シリシリシリ・・・

「あーーーーー!!」

昨日このまま寝ちゃったんだ!

シャワーしてる時間ないじゃん!!」

マヤは急いで用意して喫茶店に向かった。

「おはようございます!!」

「マヤちゃん、今日は寝坊かしら?

遅刻じゃないからいいんだけど、急いでね?」

マヤは急いで制服に着替えて仕事を始めた。

「マヤちゃん、ユリちゃん休憩行ってね。」

大概はユリちゃんと休憩は同じだ。

「ユリちゃん、お疲れ様。」

「おつかれ!

てゆうか、マヤちゃん彼氏いたんだね。」

「え?」

「昨日さ、駅前の店でギャル汚とデートしてたじゃん。」

意外だよな。

ああゆうのがタイプなんだ？」

「あ、彼氏じゃないよ。」

「そうなの？」

もしかして、ホスト？！」

「違うよお！！」

ホストクラブなんて行った事ないし……。」

「なんだ。」

ホストに貢いでキャバなのかと思った。」

「友達！」

「へえ。」

あんな友達いたんだあ？」

ユリは明らかに怪しんでる感じだった。

「ま、まあね。」

「ところでさ、キャバまじに働くの？」

「だから、働くとかじゃなくって……。」

「正直に言いなよ？」

別に誰にも言わないからさ！」

ユリちゃんに言ってみようかな。

キャバで働いてたから何でも教えてくれそうだし・・・。
ヒロキ君のことは言わなきゃいいんだよね。

「実はね・・・。」

この前スカウトされちゃって、ちょっと興味があるって言うか・・・。
」

「やっぱりね。」

スカウトの言う事なんてほとんど嘘だと思いなよ？
働く働かないはマヤちゃん自由だけど、店選びって肝心だし。」

「嘘って？」

「スカウトってさ、紹介してその店で女の子が働いたらお金貰える
んだよ。」

だからあれやこれや言って誘い込むの。
色使つのも多いみたいだしね。」

「色って？」

「ん〜。」

簡単に言つと、気があるフリして相手をその気にさせるみたいな感
じかな。」

「え・・・。」

「もしかして？」

マヤちゃん色使われて働こうって思ったの?!」

「そんなんじゃないけど、わかんない。
いい人だとは思っけど・・・。」

「バカじゃない？」

「そんなのに引っかけたったらいい恋出来ないぞ？」

「そんなんじゃないよ。
ほんとに。」

「ま、相談なら乗るからさ。」

そう言うところには仕事に戻った。

色・・・？

やっぱりね。

あんなにカッコイイ人が私のことなんてね・・・。
わかってたことだけど、やっぱりちょっとショック。

「お疲れ様でしたあ。」

「マヤちゃん!!」

「ユリちゃん。」

「コーヒー行く？」

「ごめん。」

「今日キャバクラの体験行くの。
一日だけだから。」

「そ？

ま、無理しちゃダメだよ？」

「ありがと。

じゃあね。」

不安なまま帰宅してシャワーを浴びた。
今日はやっぱり断ろう。

ブルルルルルル

お風呂場を出るとヒロキから電話が鳴った。
ブルルルル・・・・・・・・。。。

マヤは電話に出なかった。
もう、このままさよならしよう。

それからヒロキから電話が鳴る事はなかった。
マヤはちゃんと断れば良かった。
そんな後悔をしながら眠りについた。

朝起きると、やっぱりヒロキからの着信はなかった。
忘れよう。。。。

仕事の準備をして今日も喫茶店に向かった。

「おはようございます。。。。。」

「あら、マヤちゃん。」

おはよう。

元気ないわね？」

「店長・・・。」

「でも、仕事は別だからね。
笑顔、笑顔！！」

「はい・・・。」

休憩時間。

今日もユリと一緒にだ。

「昨日体験どうだった？」

まあ、見るからに想像と違ったみたいな感じだけど。」

「昨日体験行かなかったの。」

「何でえ？」

「不安になっちゃって・・・。」

「ははは。」

それでいいんじゃない？

無理してしなきゃいけない訳じゃないしさ。」

「そう、だよな。」

「じゃ、今日はコーヒー付き合ってよね？」

「うん……。」

仕事が終わリ駅前の喫茶店に向かった。

「あ……。」

ヒロキがあの時と同じようにスカウトをしていた。

謝らなきゃ……。

「ユリちゃん、先入ってて。」

「はぁーいよ。」

ユリはちよつと呆れた顔をしながら喫茶店に入った。
マヤはヒロキの方へ走って行くとヒロキはマヤに気づいて手を振った。

「昨日はごめんなさい!!」

「おー。」

急に不安なつたかあ？

「う、うん。」

「やっぱり無理してたんじゃない。
無理しなくても、まじで大丈夫になってからでいいんだよ。
そんな焦んなよ。」

「怒ってないの?」

「そんなんで怒るかよ。」

「マヤが不安な気持ち知ってるし。時間が近づくに連れて不安な気持ちはデカくなるもんだし。」

「ホントにごめんなさい。」

「まじ、怒ってねえって。」

「それより、マヤともう会えないのかと思った。」

「嘘ばかり……。」

「嘘だつて〜?!」

「そんな嘘ついてどうすんだよ。」

「色……使ってるんでしょ?」

「はあ?」

「俺はホストじゃありません!」

「てゆうか、もしかしてそれで昨日来なかったのか?」

「……。」

「ありえねー。」

「ま、こんな仕事してる奴すぐに信用出来ねーわな。」

「……。」

「ならさ、俺とまたメシ喰いに行ってくれよ?」

「まじ、それだけでいいし。」

「何で？」

「そんなの意味ないじゃん。」

「あのオムライス旨かったし、マヤが旨いって思うもん食いたい。俺メジャーなやつしか食ってなかったからさ、もっと色んなもん食ってみたいくなつてさ。」

「マヤなら色々知ってそうだし。」

「ほんとにそれだけ？」

「疑うのは勝手だけどよ、俺が一人であんな店入れねーだろ？」

「あはははは。」

「それもそうだよね。」

「やっぱり楽しい。」

「ご飯食べに行くだけ・・・。」

「仕事抜きでもいいんだ。」

「ヒロキはユリちゃんが言ってた人とはきつと違う。」

「また連絡してもいい？」

「もちろん。」

「あ、そろそろ行かなきゃ。友達待たせてるんだ。」

「了解！」

「またな！！」

「ナンパされても付いてくなよ！」

クたつぷりのカフェオレを頼むのだ。

「体験くらいなら悩む必要はないと思うよ。」

「え？」

ユリはなかなか本当のことを言わないマヤに後押しをするかのように言った。

「体験はさ、嫌んなったら帰ればいいし。」

何より一回行くだけで次からも自分の行きたい日に行けばいいだけじゃん。

嫌ならもう一生行かなくてもいいし。

小遣い稼ぎに体験ばっか行ってる子も多いみたいだよ。」

そう言うときユリはマヤの顔をじっと見つめた。

どうやらマヤの反応を見ているようだ。

マヤが口ごもっている間にユリはタバコに火を付けた。
メンソールの香りがテーブルに広がった。

「ユリちゃんタバコ吸ってたっけ？」

バイトの休憩中にユリがタバコを吸うところをマヤは見たことがない。

「辞めてただけど、喫茶店とかではついね。」

ユリは三口程吸うとタバコの火を消した。

「そうなんだ。」

おいしい？」

マヤはタバコを吸ったことがない。
煙を吸うなんて考えられないのだ。

「おいしいとか、よくわかんないな。
吸いたくなるから吸う、みたいな？」

「意味不明だよ。」

マヤにはタバコを吸いたくなる気持ちなど全く理解できなかった。

そういえば、ヒロキはタバコ吸ってなかったな。

ああゆうタイプの人って皆吸ってるイメージあるのに。

「あのギャル汚に吸わせてもらったら？」

ユリはまたいやらしくニヤニヤした。

「ヒロキ君は吸わないよ。
見たことないし……。」

「へえ、珍しいね。
あんな見た目で。」

ユリも珍しく思った。
ギャル汚は元やんちゃだった子に多いからだ。

「とりあえずさ、体験くらいならユリも一緒に行ってあげるから
人で暴走すんなよ？」

「ユリちゃん・・・。」

ありがと、でも彼氏さんに怒られちゃうでしょ?」

「バレなきゃ大丈夫よ。」

一回くらいならね。」

やましい気持ちで行く訳じゃないんだし。」

ユリはきっぱり言い切った。

「ほんと、大丈夫だから。」

何かあつたら相談乗ってよ?」

「そ?」

いつでも、言つてよね。」

ユリは自分の知ってることになるはずと協力しようとする。

中学の頃からやんちゃくれで、高校にも行っていないから誰かに頼
られたいのだ。

二人は楽しくバイトの話やユリの彼氏の話、時間も忘れて喋った。

「もうこんな時間?」

「早いね。」

慌てて二人は店を出た。

ヒロキはもうそこにはいなかった。

マヤは少しガツカリしながらユリとわかれた。

家に着くともう11時をまわっていた。

「お風呂入って寝よう……。」

マヤがお風呂に入る準備をしていると携帯が鳴った。
ヒロキからだ。

「も、もしもし？」

「あ、俺。」

ちゃんと家帰ったかあ？」

ヒロキの優しい声……。

マヤはこの声を聞くとつい正座になってしまう。

「今帰ったとこだよ。」

どうしたの？」

「ん？」

声が聞きたくなっただけ。

無事に家着いて安心した。」

「子供じゃないんだから。」

マヤは心配してくれるのが嬉しかった。

「そか、じゃまた明日連絡するからちゃんと出るよ！」

「あ、うん。」

マヤは申し訳ない気持ちになりながらも、また明日ヒロキと話せることを嬉しく思った。

緩みっぱなしの顔のままお風呂に入りキャバクラの体験に行くことを決意するのだった。

夕食

「ちゃんと考えたんだけど、体験行こうと思うの。」

バイトでの休憩中、マヤはユリを真っ直ぐ見ながら少し小声で言った。

ユリは少し驚きつつもすぐにやっぱり、と全てを見通してたかのような顔で答えた。

「マヤちゃんが決めたことならユリは何も言わないよ。」

「これからも相談とかするかもだけど聞いてくれる？」

マヤは少し心配そうにユリに問いかけた。

人に頼られるのが大好きなユリは「もちろん。」と優しく笑った。

仕事が終わリマヤはヒロキに体験に行くことを告げた。
電話の向こうから心配しながらも心強い声が聞こえた。

ヒロキ君がいるなら大丈夫。

ヒロキ君が喜ぶなら・・・。

マヤは自分でも驚くくらいヒロキに惹かれていた。
ヒロキになら裏切られてもいい・・・

心のどこかにそんな気持ちまで生まれていた。

電話を切るとマヤはシャワー室に飛び込んだ。
仕事の前にヒロキと食事に行く約束をしたのだ。

ヒロキがおいしいと言いながらオムライスを食べた姿がまだ目に焼きついたままマヤの顔には一瞬の迷いも不安もなかった。

- - - - -

マヤは前と同じ様に濃いメイク、少し派手な服を着て家を飛び出した。

マヤが待ち合わせの場所に着くと、ヒロキが手を振って駆け寄ってきた。

「今日も可愛いじゃん。」

「ヒロキ君の笑顔には負けるよ。」

マヤは照れながら軽く流した。

そしてまたオムライスの専門店に入った。

「今日はトマトソース系とかどう？」

「げ！トマト苦手なんだよなあ・・・。」

ヒロキが渋い顔をする。

「トマト苦手でもトマトソースはまた違うと思うけどなあ。これを機にトマトデビューしたら？」

「まあ、オムライスに合わなくもない感じだし食ってみるか！」

「お、男らしいね。」

じゃあ、私カレールソースの頼むから食べなかったら交換ってことにしようか？」

「そんなのいらね。」

マヤが食えて俺が食べねーとかカッコ悪いし食ってから心配すんな。」

そう言うときロキは店員を呼び、強引にトマトソースのオムライスを二つ頼んだ。

「後悔しても知らないんだから。」

- - - - -

「お待たせしました。」

ヒロキとマヤが他愛無い会話をしているとオムライスがテーブルに運ばれた。

トマトソースのいい香りがする。

「お、意外とうまそう！！」

ヒロキはそう言うときオムライスを一気にほうばった。
すぐに渋い顔になる。

「どっ？」

マヤが心配そうに聞く。

ヒロキは少しとまどいながら「ヤバイ。」と答える。

「だから言ったのに・・・。
違うの頼む？」

マヤは少し呆れながらも心配そうに尋ねる。

「大丈夫。食えないほどじゃねーし。」

ヒロキはまたオムライスをほうばる。
やっぱり渋い顔をする。

「ヒロキ君で強がりなんだね。」

「当たり前。」

男が女の前で強がらないと女が弱くなねーだろ？」

たかが、食べ物ひとつで強がるヒロキがマヤには男らしく、
そして頼りに見えた。

それからヒロキは黙々とオムライスをほうばっては苦い顔をした。
マヤはくすくす笑う。

「ごちそーさん！」

マヤが半分くらい食べたところでヒロキが食べ終わる。
口に合わないから一気に食べたのだろう。

この前より食べ終わるのがずいぶんと早かった。

「マヤってリスに似てんな！」

ヒロキがマヤをじっと見つめながら言う。

「何が？」

「なんで？」

「食いモンほつぺにためすぎ。」

「そんな見ないでよ。食べにくい……。」

マヤは恥ずかしくなって食べるのをやめた。

「悪い。」一言謝るとヒロキは遠くを見つめた。

マヤが食べ終わるとヒロキがマヤの方を向いて”本題”に入った。

「今日どうする？」

「頑張れるよ。」

いつまでもこんなじゃ意味ないじゃん。」

「わかった。」

そう言うときヒロキはどこかへ電話をかけた。

どうやら相手は仕事先の人のようだ。

急に不安が押し寄せる。

そんなマヤに気づいたのか、ヒロキは口パクで「大丈夫だから。」とウィンクした。

不安な気持ちが少しずつ解けていく。

電話が終わり二人はレジに向かう。

マヤが財布と出すと、ヒロキが一万円札をレジに置き「一緒に。」と店員に言いパツパと会計を済ませ店を出た。

「早くしまえよ。バカマヤ。」

「でも、オゴリは初回だけって……。」

「冗談も通じねーの？」

誰が女に金出さすかっての。」

ヒロキが笑う。

マヤは少し申し訳なさそうに「ご馳走様。」と言った。

そしていよいよキャバクラに行く時が来た。

夕食（後書き）

次回、いよいよマヤがキャバクラデビューです。

読者の皆さん、どうぞマヤを応援してやって下さい。（・）

デビュー

二人は満腹なり、すぐに店に向かった。
店の前でヒロキが振り返った。

「本当に大丈夫か？」

ヒロキが心配そうにマヤに問う。

「まかせて!!」

マヤは強い意志をもって答えた。

ヒロキは納得したかのように笑みを浮かべ店内に入った。

店内は薄暗く、客とキャバ嬢の声でにぎわっていた。

前は働く気などなかったマヤは店内とちゃんと見ていなかったのだ。
テクノの音楽が小さく店内に響いていた。

たくさんの人でにぎわっているが落ち着いた雰囲気がある。

マヤが店内を見渡しているとヒロキが手招きした。

それに気づくと早歩きでヒロキの元へ急いだ。

そこには長い髪の23歳くらいの男がグラスを洗っていた。

「今日体験で入るマヤちゃん。」

マヤはその男に軽く会釈する。

すると男は手を止めマヤに微笑んだ。

「俺はこのボーイのマサユキ。
よろしくね。」

「ど、どうも。」

マヤです。

よろしく願います。」

緊張しているからか、自然と声が小さくなる。

ヒロキが奥の部屋からまた手招きした。

マヤもそこへ行くとそこには大きい鏡に全身鏡。

テーブルにはコテや化粧ポーチが置いてある。

部屋の隅にはドレスがざつと並んでいる。

「ここが待機室。」

待機中はここで化粧直すなり、髪セットするなりしていいから。
皆汚くしてるけど、一応皆が使うところだから・・・」

「わかった。」

「んで、ここにあるドレス、一応貸しドレスだから好きに使って。」

「どれでもいいの?」

「もちろん。」

今日どれにする?」

「こんなにあると悩むよ・・・」

そこには黒い大人っぽいものから花柄の派手なものまで20枚近く

のドレスが並んでいた。

「これは？」

俺的にマヤには似合うと思うんだけどな。」

ヒロキは一枚のドレスを手を取った。

ピンク色のロングドレス。

中央は透けていて、裾に向かって広がっている。

胸元にはジュエルがちりばめられていてキラキラと光っている。

「可愛い!!」

マヤはすぐにそのドレスを気に入り、それに決めた。

「洗い場と入り口の間トイレあるからそこで着替えて。
俺ここで待ってるから。」

マヤはすぐにトイレに向かった。

トイレは狭く、個室が二つしかない。

手前の個室に入り着替えた。

着替えが終わるとまたすぐに待機室に向かった。

「ど、どうかな？」

少し照れながらヒロキに問う。

「めっちゃ可愛い!!」

「そう・・・かな？」

「全身鏡見てみ。」

ヒロキは鏡に目をやった。

マヤは少し黙り込んでドレスを着た自分を見つめた。

「うわぁ。」

別人みたい。」

ピンク色のドレスは童顔のマヤにはとても似合っていた。
まるでどこかの国の姫様になった気分になれた。

「俺ってセンスいいな！」

ヒロキは自慢げに言った。

マヤが軽く首を下に振った。

そのときヒロキはマヤに5枚の名刺を差し出した。

「これ白いトコに名前書いて。」

あ、大事な事忘れてた。

源氏名どうすっかな？」

「そっか。」

キャバクラって違う名前使うんだよね。」

「まあ、そのままの子もいるけどね。」

俺おすすめの名前あるんだ。」

「何？」

「”ユリ”。

花の名前は这个世界じゃ縁起がいいって言われてて。マヤが良ければどうかな？」

「うん。

花の名前なんてキレイ。」

「じゃ決まりだな。」

マヤは元々花が好きで、そうゆう名前に憧れてたところもあった。早速名刺にピンクのペンで名前を書く。

”ユリ”と・・・。

その名刺には大きく金色の文字で”TIARA”と書かれていた。このキャバクラの店名だ。

このときマヤは初めて店の名前を知った。

「TIARAって言うんだ。」

「ははは。

今更かよ？」

ヒロキが大きく笑う。

「あんまりちゃんと見てなかったから・・・。」

マヤは少し恥ずかしくなった。

するとヒロキが奥の戸棚の戸を開けた。

「財布は金庫に入れるから、化粧道具とかすぐに必要なもん以外はここに入れて。」

「分かった。」

マヤは化粧ポーチと財布。

それに携帯電話をカバンから出して戸棚に直した。

ヒロキはマヤの財布を金庫に入れてしっかり鍵をした。

「じゃ、ある程度仕事の説明するからそこ座って。」

マヤが一番近いイスに腰掛けた。

すっかり働く事を忘れていて、急に緊張が押し寄せてきた。

「灰皿は2本たまったら交換がここでの基本だから。」

簡単な仕事の説明を終えるとヒロキはマヤの頭をなでた。

まるで、マヤの緊張をほぐすかのように・・・

「何かあったらすぐ俺呼べよ。」

我慢しないでいいから。」

「ありがと・・・」

頭をなでられたからか、ますますマヤは緊張した。
顔は少し赤らんでいる。

ヒロキが彼氏だったらどんなにいいだろう。
そんなことを考えていると、マサユキが待機室に入ってきた。

「新規の客来たからマヤちゃん行って。」

「え！」

早速の接客にマヤは動揺した。

そんなマヤを察したのかマサユキは優しく微笑んだ。

「大丈夫。」

一応ベテランの子つけるしフォローしてくれると思うから。」

ほんの少しだけ安心した。

そしてマヤは心に決めて待機室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1627d/>

スカウトマン

2010年10月9日23時29分発行